

その立場には、唯一、単純、最大な超越的事物（神）の完全性から、エンスその他の超越概念を導出しようとする傾きがあると思われる。そこから「最大に第一のもの」(*De Pot* 9. 7, ad 6) と言われるエンスが、最大、完全なエンス、*esse* そのものと言われる神と同一視される結果が生じてくるのはさほど困難なことではなかろう。それはまた超越概念思想そのものの衰微を促す要因にもなろう。しかしオンを唯一の事物的本質とみなす形而上学的思考を Ar はパルメニデス-プラトンの的としてもっとも強硬に反対したのであった。存在思想の源泉を明確に捉えておくのは、さまざまな支流が流れこむ「存在の大河」を見極めるために必要なことであろう。

(2) Ar がオンとヘンは事物の本質・本性でない主張するのは、それらが特定の实在物と対応することがないからである。さもなくば、それらがどんなものにも無差別的に述語づけられることはないであろう。しかし实在論的立場において、オンとヘンが全实在に対応すると信ずることはできる。なぜならその立場からすれば、それらが实在からのなんらかの抽象であるはずだからである。しかしそれを証明することはできない。われわれがそれらを使って实在論を立てるオンとヘンを、どうして实在論的に証明できるであろうか。それゆえオンとヘンは实在論の根拠であり、最大の存在論的原理である。オンとヘンほど中身の希薄な原理はないであろう。しかし、神すらも包括できるような、その外延は恐しいまでに無際限に広く、深いと言うべきであろう。

(3) あると言われるものの無際限な広さ、深さを、Ar は「あらゆるものは無条件的にあるわけではないが、或るあらゆるものであることにはなんらの妨げもない」(*Phys* A3. 187a 5; cf. *Met* Γ2. 1003 b 10) という言葉で表現している。あると述べられるだけの世界は「可能世界」を含むことができる。したがって存在論的認識が架空を生みだす恐れは排除できない。それに対して神の無からの創造的認識はただ实在を生みだすであろう。

提題 トマス・アクィナスの「在るもの」と
「一」との置換説

山本耕平

「在るもの」(ens) と「一」(unum) とは置換 (convertere) される。「在るもの」

はすべて「一」であり、「一」はすべて「在るもの」である。この主張は「名称」(nomen)、「概念」(ratio, conceptio)、「实在」(res)の区別と関係が前提されて始めて意味のあるものとなろう。

实在は万人に同じものとして在る。实在を志向的に表示する概念は实在の類似である。名称は概念を表示する記号として制定される。实在が根本に在るが、しかし名称、概念、实在の各々は独自の領域を形成しており、それらの一方が他方に吸収或いは還元されることはない。

「在るもの」と「一」とが置換されるのは实在の領域においてである。「在るもの」と「一」の名称と概念の表示する实在が同じ实在であるが故に、両者が置き換えられるのである。しかし「在るもの」と「一」の概念内容は異っている。概念内容までが同じであるとすると両者は完全な同義語になってしまい、両者の置換性の主張は無意味となるであろう。それゆえ同じ实在を「在るもの」と「一」という異なる概念が捉えている意味内容とそれら両概念の関係とが明らかにされ、同時に同じ实在が「在るもの」と「一」と捉えられるその根拠が「同じ实在」のうちに示されねばならない。

实在の何がどのように「在るもの」と「一」の概念において捉えられているかの理解は「在るもの」と「一」の概念を形成する仕方が手掛となるであろう。实在を「在るもの」「一」と捉える主体は人間の知性である。肉体と結合している人間知性はこの可感的質料的世界に存在している。それゆえ人間知性の直接的な最初の認識対象となる实在はこの可感的質料的世界に具体的に存在している個的なものである。

知性が最初に最も知られたものとして捉えるものは「在るもの」であり、知性は自らの抱く他の全ての概念を「在るもの」に還元する。また知性によって最初に捉えられるものは「在るもの」と「本質」であるとも言われる。知性は可感的質料的实在に出会い、そのものを最初に「在るもの」として捉え、かつその在るものの「本質」即ち在るものが「何かであること」を同時に捉える。实在を知性が「在るもの」(ens)即ち「存在しているもの」(id quod est)として捉えるとき、その实在の「存在の現実態」(actus essendi)も何らかの仕方で知性は捉えているであろう。また实在が「在るもの」としてのみならずその本質、即ち「何か」が最初に同時に捉えられるとき、「在るもの」として捉えられているその实在が無限の在るものではなく、何らかの本質によって限られた「有限な在るもの」と認識されていることを意味するであろう。「在るもの」が認識において「一」

と「多」に区別される根拠は実在を最初に「何かとして在るもの」と知性が認識するその発端に存すると思われる。

実在している諸事物は多である。多数の在るものが存在している。そして我々が経験する諸事物は全て何かとして在る。それらは全て在るものであって在らぬものではない。それゆえ実在の「全て」が「在るもの」として理解されること、即ち「在るもの」の概念がその外延において最も普遍的であることは多言を要しない。「在るもの」の概念の内包については古来より議論されてきている。或る実在が「在るもの」と認識されるとき、その実在は最も豊かに最も深く理解されることとなるのであろうか。実在している個々の事物は「在るもの」と認識されるとき、その事物において存在 (esse) しているもの全てが存在している限りにおいて認識される。それゆえ実在の事物は「在るもの」の概念においてその全体が全面的に認識されることとなる。しかし「在るものの有する様態」(modus entis) の全てが「在るもの」の概念に「全く明瞭に」表出されているわけではない。他方しかし在るものの様態が「在るもの」の概念において「全く認識されていない」わけでもない。在るものの様態は在るものにおいて何らかの仕方存在 (esse) しているものである。従ってそれら様態も存在している限りにおいて「存在 (esse) しているもの」である「在るもの」の概念において認識されていなければならない。しかしそれら在るものの様態は様態として「在るもの」の概念のうちに明瞭に表出されているわけではない。在るものの様態は「在るもの」の概念において confuse et unite に認識されていると考えられる。実在を「在るもの」と捉えるとき実在の有するあらゆる完全性が何ら制限されることなく、confuse にはあるがその全てが捉えられている。この意味で「在るもの」の概念の内包は最も豊かである。しかし「在るもの」の概念が confuse に含んでいる実在の様態を明瞭に捉えるためには「在るもの」の概念に別の概念が附加されねばならない。

「在るもの」の概念への附加は二様に区別される。この区別の根拠は在るものの様態が「特殊の様態」(specialis modus entis) と全ての在るものに伴う「一般の様態」(generalis modus entis) とに区別されることにある。在るものは特殊の様態によって範疇へと制限され限定される。在るものの特殊の様態は在るものの在ることが「それ自体で在る」(esse per se) ことと「他者において在る」(esse in alio) ことの「在ることの度合」(modus essendi) の相異によって認められる。これら様態を表出する概念が「在るも

の」の概念に附加されるとき、実体と附帯性の諸概念が形成される。

在るもの全てに伴う一般的な様態を表出するためには第二の附加が要請される。実在している個々の在るものにそれらが在るものである限りにおいて共通必然的に伴う様態が見出される。これらの様態を「在るもの」の概念は *confuse et unite* に含みつつも明瞭には表出していない。このような一般的様態を表出する概念が *transcendentia* といわれる。これら様態は在るものの範疇のいずれにも見出されるが、しかしいずれの範疇にも限定されないという意味で「範疇を超えるもの」である。かかる概念として「もの」(*res*)、「一」(*unum*)、「或るもの」(*aliquid*)、「真」(*verum*)、「善」(*bonum*)が指摘される。

一般的様態は「在るものそのものにおける」在るものの様態と「他のものへの秩序、関係における」在るものの様態とに区別される。後者の様態を表出する概念に「或るもの」「真」「善」が含まれる。前者の様態は更に「肯定的に」見出される様態と「否定的に」見出される様態とに区別される。在るものそのもののうちに肯定的絶対的に見出される様態は「本質を持つこと」である。在るものは本質に即して存在している。本質によって在るものは限られた存在を持っている。本質は在るものの存在を有限化する在るものの根原である。在るものは本質によって「何か」として在る。本質によって「何か」として在る在るものの様態を「もの」(*res*)の名称と概念が表出する。

在るものの否定的様態は「不可分性」(*indivisio*)である。不可分性とは分割の否定或いは欠如に他ならない。一般に分割が多の、不可分が一性の原因である。それゆえ在るものにおいて否定されている「分割」の意味が明瞭にされねばならない。分割は「質料的分割」(*divisio materialis*)と「形相的分割」(*divisio formalis*)とに区別される。質料的分割は連続量の分割である。従ってこの分割を欠如している「一」も、この分割に伴う「多」も共に量の範疇に限定されている。量の一種である「数」は質料的分割によって生ずる。他方この分割を欠如しているものが「数の根原」といわれる「一」である。「数の根原」である「一」と「在るもの」と置き換えられる「一」とは厳密に区別される。在るもの[・]の[・]不可[・]分[・]性[・]は質料的分割の欠如、否定によっては理解されえない。

形相的分割は対立または異なる形相によって生ずる。或るものはそのものに固有な形相によってそのもの[・]として在る。別のものはそのものに固有な形相によってそのもの[・]として在る。各々のものはそのものの形相によってそのもの[・]として在る。同時に各々のも

のはそのものの形相によって「他のものではないもの」として在る。即ち他のものから分割されて在る。個々の実在しているものはそのものの形相或いは本質によって「このものはあのものではない」という仕方成形相的に分割されて在る。形相的に分割されて在るものが在るものとして在る。従って在るものが在るものである限り更に形相的に分割されることはありえない。もし分割されると在るものは二つの在るものとして在ることになろう。在るものがこのような分割を欠如するものとして認識されるとき、在るものは「一」として扱えられる。「在るもの」と置換される「一」は形相的分割を欠如する「一」である。

在るものがこのような分割を欠如する実在的根拠は存在と本質とから成る在るものの、本質と本質を現実化している存在との複合の不可分性にある。在るものは本質と存在とが複合して現実的に実在している。それゆえ在るものの不可分性の認識は在るものが存在と本質とから複合されているという実在的現実的事実の否定的認識にすぎない。否定されているのは在るものの本質と存在との少くとも現実的な分割の否定である。この否定によって在るもの自体のうちの積極的な実在性が否定されているわけではない。在るものは在るものである限り分割されるという不完全性を欠如しているのである。それゆえ「分割されない」ことは在るものそれ自体の実在性と別の実在性ではありえない。「不可分」という欠如或いは否定は実在のうちに何ものをも措定しない観念有である。在るものが不可分と認識されるとき、在るものそれ自体はいささかも制限されていない。しかしながら在るものが不可分であると認識されるのは在るものが存在と本質とから複合されていることの明確な認識をまって始めて可能となるものでもないと思われる。可感的諸事物に出会って人間知性に最初に入ってくるものが「在るもの」と「本質」であった。質料的事物を知性は「何か (essentia) として在る (esse する) もの」として最初に捉えている。人間知性は「在るもの」を「何か」と「在ること」の不可分なものとして最初に捉えていると考えられる。

在るものである限りの在るものの、在るものそれ自体において見出されるこのような不可分性という様態はしかし「在るもの」の概念それ自体において明瞭に表出されていない。この様態を明瞭に表出している概念が「一」である。在るものの不可分性の様態を認識するために「在るもの」の概念に「不可分なもの」という概念が加えられる。「一」が「不可分な在るもの」と言われるゆえんである。「在るもの」と「一」が概念的

に異なるのはこうした概念的な附加にもとづく。しかし上述のように「一」の概念は「在るもの」の概念が表示する「實在」を何ら制限しておらず、全ての在るものに見出される在るものそのものの否定的様態を表出している。「一」と「在るもの」の両概念の表示している「實在」は同じものである。

「在るもの」と「一」とが同じ普遍性を持つこと、両者が概念的に異なりながら、その表示する實在に関して置き換えられることの意味は以上より明らかであろう。

「在るものである限りの在るもの」の「原因」である「神」において「在るもの」と「一」とが最高の意味において置換されることは別に論じられるであろう。